

コーヒー栽培に見た 格差と未来の可能性

グアテマラで日本経済論を講義する

うけだ ひろゆき
受田宏之

東京外国語大学 非常勤講師



グア テマラという国名を聞いて、何を連想するだろうか。「メキシコの南にある小さな国々の1つ（面積は日本の約4分の1）」、「マヤ文明が栄華を誇った地域で、現在もマヤ系の先住民が多い（1300万人の国民の約半分が先住民）」、「ノーベル平和賞を受賞した先住民女性がいる（リゴベルタ・メンチュウ氏）」、「日本で

も売られる香り高いコーヒー豆の産地である（2005年の生豆輸入額は第3位）」。日本の大学生で、このうち1つでも知っているれば、博識なほうだろう。逆に、グアテマラ人にとって日本は遠い国である。この国では少数派である中産層以上の間でも、日本のイメージは、「アジアの豊かな国で、トヨタの乗用車など優れた工業製品を

生産し、代わりに自分たちはコーヒー豆を輸出している」といったものである。

私は

06年8月に3週間ほど、グアテマラを代表する大学の1つ、ラファエル・ランディバル大学で、経済経営学部の大学院生を相手に日本経済論と日本—グアテマラ関係の将来について論じる機会を得た。教室の外では、企業家や輸出振興団体の職員の前で講演をしたり、新聞記者のインタビューに応じたり、コーヒー農園を訪れたり、受講生に古都アンティグアを案内されたり、と現地の人びとと交流した。

在グアテマラ日本大使館による周到な準備もあり、05年度に始まった本派遣企画は、両国の関係の発展にささやかながら貢献したように思われる。大学の図書



コーヒーの実。赤く熟した実は一つひとつ手で摘んだあと、農園内の施設で果肉を丁寧に取り除き、さらに重量等による選別を経た豆（種子）を天日で干す
写真提供：筆者（以下も同じ）

館に私が携行した日本経済に関する文献が寄贈され、受講生も私も議論を通じてお互いを理解することができた。受講生はみな仕事を抱えつつも知識の向上に励んでおり、彼らの熱意と柔軟な発想に希望を見出すことができた。

グア

テマラの主な輸出品であり続ける、コーヒーのことに触れてみたい。ランディバル大学の雑誌に「グ



週末に受講生と談笑する筆者（手前・左）。古都アンティグアのレストランにて

うけだ ひるゆき ●東京大学教養学部卒業後、同大学大学院経済学研究科博士号取得。専攻はラテンアメリカ経済論、開発経済学、先住民の開発に関する実証研究。（財）海外投資情報財団調査員、日本学術振興会特別研究員等を経て、現在は東京外国語大学、東京大学などにて教鞭を執る。メキシコに調査研究活動のため、1992年以降のべ4年以上滞在中

「アテマラ・コーヒーと日本市場」についての論文を書く機会を得たこともあり、滞在中はコーヒー関係者と会うよう努めた。グアテマラ全国コーヒー協会（ANACAFE）幹部とのインタビューでは、品質管理や輸出促進、生産者への情報提供といった活動を通じて同協会が、クオリティ・コーヒーの生産国としてグアテマラが世界的に認められる過程で大きな役割を果たしてきたことが確認できた。日本におけるグアテマラ・コーヒーの最近の躍進には、サントリー社による「グアテマラ高級豆の使用」を売りにした缶コーヒーのヒットが寄与したが、それを支えたのは、ANACAFEとサントリー、日本の商社間の相互信頼と協力であった。

日本に豆を輸出している2つのコーヒー農園を訪れたことも、忘れたい思い出となった。コーヒーは、温暖で起伏の激しい緑豊かな土地で、機械よりも人力に頼りつつ細心の注意を持って、栽培、収穫、選別される。グアテマラでは直射日光への過剰な露出を避けるため、コーヒーの木は高木の下に植えられるのだが、これも、お茶畑のような姿を想像していた私には驚きであった。農園でコーヒーを「ごちそうになったときは、本当においしいコーヒーとは酸味や苦味といった単純な物差しで表わせるものではなく、複雑でまろやかであり、官能的でさえあることを知った。

その

一方で、コーヒーラ「陰の」部分も垣間見ることになった。訪れた農園で、赤く熟れた実の手摘みなどの農作業に従事するのは、その大半が季節的に雇われる農業労働者である。彼ら農業労働者の多くは先住民であるが、軽トラックの

荷台にすし詰めになって移動する先住民と農園の所有者、大学に通う中産層らとの間の経済的な格差、社会的文化的な距離は極めて大きなものがある。こうした不平等な社会の構造は、1996年に終結した内戦の背景をなした。

グアテマラの抱える困難や課題は乗り越えられないものではない。たとえば、厳格な品質管理と創造的な市場戦略に裏打ちされたコーヒーの生産と輸出の拡大は、先住民ら小生産者組合の能力改善（先述の缶コーヒーにも彼らの作った豆が含まれている）、教育の普及等の社会開発、非農業の雇用機会の拡大といった条件と合わされば、先住民にも利益をもたらさだろう。

グアテマラでは数多くの外国人が支援活動を行なっている。そのなかには、国際協力機構（JICA）や人権NGOで働く日本人も含まれる。今後、経済、政治、社会、文化のあらゆる面で、日本とグアテマラの交流が深まることを願ってやまない。